

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.11 November 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
正岡子規に学ぶ「陽気」
／高見宇造 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (34)
「大蛇」について①
／佐藤孝則 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (23)
太平洋戦争と北米伝道①
／尾上貴行 3
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (32)
「おさしづ」第3巻における「個人の身上・事情」と「道」
／澤井治郎 4
- ・ 日本語教育と海外伝道 (4)
日本語教育で使われる教科書について②
／大内泰夫 5
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (2)
英語帝国主義時代の学術言語—研究と発信の逆説
／金子 昭 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (40)
文化遺産を今に活かす⑧ 発掘調査から読み解く平安京
／桑原久男 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (21)
ド・ゴールの住居
／森 洋明 8
- ・ 天理参考館から (15)
実りの秋を支える農具
／幡鎌真理 9
- ・ 現代宗教と女性 (21)
ケアする側の優位性
／金子珠理 10
- ・ 思案・試案・私案
失われる命・・・“旧優生保護法”③
／八木三郎 11
- ・ 図書紹介 (108)
Lay Buddhism and Spirituality: From Vimalakīrti to the Nenbutsu Masters
／堀内みどり 12
- ・ 平成 30 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (4)
第4講：62「これより東」
／森 洋明 13
- ・ English Summary 14
- ・ おやさと研究所ニュース 15
日本南アジア学会第 31 回全国大会に参加 (堀内みどり)／環境 NPO との共催事業：「20 周年記念講演会」の開催 (佐藤孝則)／『天理教事典 第三版』案内／平成 30 年度公開教学講座／「出前教学講座」申し込み受付

巻頭言

正岡子規に学ぶ「陽気」

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

「今年は明治維新 150 年」という言葉に誘われ、司馬遼太郎氏の『「明治」という国家』（日本放送出版協会・平成元年）を読み返している。司馬氏は「明治は、リアリズムの時代でした。それも、透きとおった、格調の高い精神でささえられたリアリズムでした。」と書いているが、同書に取り上げられた人物の中で私は特に正岡子規に心惹かれる。子規は我が国の俳句、短歌の世界でリアリズム運動を推し進めた。ドナルド・キーン氏は『正岡子規』（新潮社・平成 24 年）で「短歌改革者」と評したが、子規はその作品を通して明治の新しい精神構造を切り開いたと言える。

子規は慶応 3 年に生まれたが、明治 29 年に 29 歳で結核性脊椎カリエスを発症し 6 年間の壮絶な闘病生活の後、35 歳の若さで亡くなっている。結核菌が脊椎に感染しまったく身の自由が効かず、背中にも腹部にも穴が開き、膿汁が漏れ出すという有様であった。年老いた母と妹が毎日包帯を取り替えるという献身的な看病を受けながら、『仰臥漫録』（明治 34 年）や『病床六尺』（35 年）などの著名な作品を残した。

『病床六尺』は、「病床六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病床が余には広過ぎるのである」という有名な書き出しから始まる。もちろん、単に病苦を書き連ねたのではなく様々な話題に触れている。一方、『仰臥漫録』では精神に変調を来し、自殺願望が起こり、動けない身でありながら小刀と千枚通しの錐に手を伸ばした日の話を記している。何とその刃物の絵まで書き残している。これをリアリズムと言うのか分からないが、いかに壮絶な毎日であったのかが伝わってくる。また毎日の天気や病状、来客者に加えて特に何を食べたかを克明に書き記した。鰻や刺身、牛乳や鶏肉、菓子パン、卵など、当時は高価なものも毎日求めて

食していた。死を覚悟した人とは思えない食、また生への執念が読み取れる。

こうした人間の生き様を何と呼べば良いのか、私にはまったく言葉がないが、最近キーン氏が前掲書で、「子規は陽気な気分で生きた」と喝破していることを知った。これに私は驚いた。なぜ、「陽気」という表現になったのか。私なりに考えるが、それは恐らく子規が『病床六尺』に「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違いで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった。」と記したからではないかと推測する。「悟り」とは、迷いが解けて真理を会得することであるが、子規はどんな境遇にあっても先ず、「平気で生きる」ことを悟るのだと言う。様々な人生の局面でいかなることが起きても「生きる」ことを悟り取るのが「陽気な生き方」の核心だとキーン氏は言うのだろう。実はこの子規の悟りは私たち、天理教の信仰者にとっては意味深長である。

「おふでさき」（十四号 24～26）には、これからハ心しいかりいれかへてよふきづくめの心なるよふ月日にわにんけんはじめかけたのわよふきゆさんがみたいゆへからせかいにハこのしんぢつをしらんからみなどこまでもいつむはかりでと教えられている。私たちは「陽気」の意味するものを、子規の闘病生活の悟りから学ぶことも、これからは大切である。

実は子規の没後百年にあたる平成 14 年頃からすでに医療や社会福祉、介護関係者が子規の作品に注目していることを新聞報道で知った。それは来たるべき超高齢社会、また難病による長期療養患者の増加が予測されるなかで、では人間の精神構造はどうなるのかと言えば、それは子規の闘病生活から学べるからとのことであった。当時、教団の福祉関係の御用をしていた私は「なるほど」と思ったものである。